

機関番号：37111

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530618

研究課題名（和文）重度・重複障害児における共同注意の障害と発達支援の要因に関する研究
研究課題名（英文）

Study on Disorders of Joint Attention and the Development Factor for Children with Multiple and Profound Disabilities

研究代表者

徳永 豊（TOKUNAGA YUTAKA）

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：30217492

研究成果の概要（和文）：

重度・重複障害児を対象として、共同注意関連行動を手がかりに、発達評価とその発達支援の要因を検討し、学習到達度チェックリストの活用を行った。1歳程度及び1歳以下の発達を評価する項目を整理し、5事例の重度・重複障害児の発達評価を行い、評価項目の改訂を行った。また、根拠となる行動と次の指導の目標設定を整理した。一年間の発達評価や行動特性を検討し、この経過について実態把握、目標設定、指導及び指導の評価に関する事例検討を行い、学会で発表し報告書としてまとめた。

研究成果の概要（英文）：

This study was to investigate features of development with Joint Attention for children with multiple and profound disabilities. The Checklist based on behavior with Joint Attention was used to assess developmental condition for these children. Five teachers in special schools for children with multiple and profound disabilities was asked to use this checklist and get information of behaviors. The description of behavior and next target setting were examined. The lessons for children with multiple and profound disabilities in schools were examined and developmental changes and features of Joint Attention behavior were discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：重度・重複障害 共同注意 発達支援 コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

共同注意に関する研究動向と重度・重複障害児の行動形成、本研究の位置づけ

(1) 共同注意の研究

本研究の目的は、重度・重複障害児を対象として、共同注意行動が形成される前後における発達評価とその発達支援の要因を検討することである。共同注意 (joint attention) とは、他者と関心を共有する事物や話題へ、注意を向けるよう行動を調整する能力である (Bruner, 1975)。この能力は、生後 9 か月頃から芽生え、14 か月頃に安定する。そして、この能力は、その後の言語、社会的情動、心の理論など、より高次の社会的認知の発達に重要な役割を果たすものである (Landry, 1995)。

この共同注意の研究は、1970 年後半の先駆的な研究以来、急速に展開してきた。Butterworth(1991)の指さし行動の分析などがあげられ、我が国では遠藤 (1997) 等の理論的・実験的な研究が中心であり、臨床的、実践的な研究が少ない。

(2) 障害のある子どもの共同注意

その中で、コミュニケーション行動としての共同注意を取り上げた実践的研究には、長崎 (1993) 等の研究がある。近年 Ohgami (1998)らのグループが、乳幼児の共同注意関連行動の発達の变化と障害の早期スクリーニング法や発達援助の評価に取り組んでいる。

これらの研究を手がかりに、「特定の人への関心」「音・名前に対する反応」「やり取り遊びの成立」や他者意図の理解としての「視野内指さし理解」「視線追従」「後方指さし理解」等を評価の指標として、障害の重度な子どもの行動を分析することは意義は大きい。また 1 歳程度の項目として、提示・手渡しとしての「応答の提示・手渡し」「自発的提示・手渡し」、指さしとしての「要求の指さし」「共感の指さし」「応答の指さし」や「催促の交互凝視」「共感の相互凝視」も参考となる。

2. 研究の目的

本研究においては次の 3 点を明らかにする。

(1) 重度・重複障害児の発達評価の方法

重度・重複障害児を対象として、共同注意行動が形成される前後における発達項目である共同注意関連行動を手がかりに、その発達の様相を明らかにする。その際に、重度・重複障害児が注意を向ける対象を検討し、「物理的対象」か「他者」(Rochat, 2001)を区別し、その行動特性を明らかにする。

(2) 共同注意の形成を促す養育者の支援要因の検討

重度・重複障害児の発達支援を考えた場合

に、養育者との共同注意を形成させることは働きかけの基盤である。そこで、子どもの注意を引きつけ、その注意を持続させ、効果的にフィードバックする養育者の行動について明らかにする。

(3) 重度・重複障害児を対象に学習到達度チェックリストを活用して、発達評価及び目標設定を検討する。

3. 研究の方法

共同注意関連行動を手がかりとした重度・重複障害児の発達評価項目の検討と適用

(1) 重度・重複障害児の発達評価項目の整理

「対象への注意」から「注意の共有」までの共同注意関連の 30 項目からなる行動評価の改訂版 (大神 2001) を基礎としながら、遠城寺式乳幼児分析的発達検査と新版 K 式発達検査の項目を参考に、1 歳程度及び 1 歳以下の発達を評価する項目を整理する。

(2) 発達評価の項目の妥当性の検討

重度・重複障害児が教育を受けている特別支援学校 (肢体不自由) で、小学部において重複障害の指導を担当している教諭 10 名に、この発達評価の項目により、重複障害児の実態把握を試みてもらい、項目ごとの行動記録をまとめる。

その際に、実態把握の実際を踏まえて、発達評価の項目ごとの課題等について意見をもらい、改善のための基本情報とする。

(3) 重度・重複障害児の指導場面における発達評価の実施

上記の発達評価項目にもとづき、重度・重複障害児の授業場面の活動から、その発達段階や行動特性を検討する。

4. 研究成果

(1) 重度・重複障害児の発達評価項目の整理

別紙 (添付ファイル) に示すように、学習到達度チェックリストを作成した。

(2) 発達評価の項目の妥当性の検討

実態把握、目標設定について実施し、項目の検討を行った。

具体的な事例

① 対象

実態：対象生徒は K 特別支援学校高等部 2 年のダウン症の男子生徒 (以下、生徒 A) であった。生徒 A は、名前を呼ばれると、手を挙げ、時折「はい」と発声による応答があった。有意味の発語はあまりないが、調子がいいと声を出すこともあった。言語理解面では簡単な指示を受けるとそれに応じた行動ができることがあった。嫌悪場面では、頭や顎を叩いて怒ったり泣いたりする。拒否の表

現では他者の腕を押し返すこともあった。床の色が変わると足下に気を配ったり、階段では手すりを使ったり、急に足取りが遅くなるなど、視覚的なハンディがあると考えられた。学習時に、支援者によって眼鏡を装用することがあった。音楽を聴くことが好きであった。学校に於いて、VOCAの活用をX年2月より開始されていた。提示されるとスイッチを押したり、好きな曲を入れておくと、自ら繰り返してスイッチを押し、音楽を聴くことを楽しむことができた。VOCAを使用したいために、教師をVOCAのある場所へ連れて行く行動も出てきていた。保護者の願いとしては、「頭を叩かない」「もっと本人の考えていることがわかったら」「トイレへ自分で行けたら」という願いがあった。

②検査結果：発達評価として、遠城寺式乳幼児分析的発達検査の結果をTable 1に示す。

Table 1 遠城寺式乳幼児分析的発達検査結果

移動運動	2:6-2:9	対人関係	1:0-1:2
手の運動	0:11-1:0	発語	0:11-1:0
基本的な生活習慣	2:6-2:9	言語理解	1:0-1:2

(H20.12.27.実施)

③学習到達度チェックリストの結果

「教科の学習に遅れのある子どものための特別支援教育における学習目標設定ガイド(学習評価チェックリスト 試行版 2008改訂版)に基づき、学習到達度チェックリストで実態把握を行った。ただし、学習到達度チェックリストは「2008.7.13バージョン」を使用したため、スコア表は加味修正した。生徒Aの学習到達度スコアをTable 2及びFig. 1に示す。

Table 2 生徒Aの学習到達度スコア表

氏名 生徒A (16歳10カ月)
障害の種別 ダウン症

教科	観点	コード	スコア
国語	聞くこと	1-5	12
	話すこと	1-4	6
	読むこと	1-3	4
	書くこと	1-5	8
算数	数と計算	1-3	4
	量と測定	1-3	4
	図形	1-4	6
生活	生活スキル	2-2	24
体育	運動・動作	2-1	18
総計スコア			86

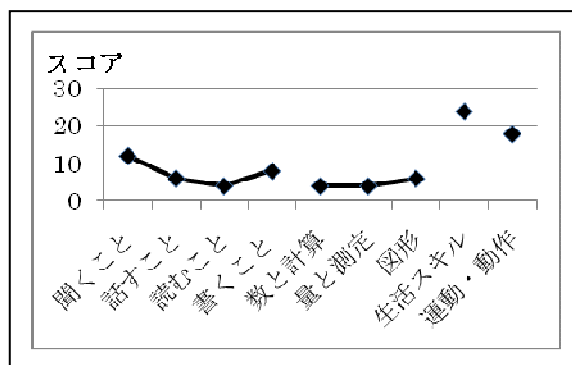


Fig. 1 チェックリストによる事例の実態

④生徒Aの学習到達度スコアの「根拠となる行動」・「目標となる行動」・「目標を達成する指導内容・方法」

学習到達度チェックリストの「国語」における「根拠となる行動」とレベル設定に関する行動の記録をまとめた。

⑤ 学習到達度チェックリスト実施上の感想・気づき

・チェックリストのみで判断した評価と、再度「根拠となる行動」を詳しく見ていくと筆者場合には評価が上がった。

・「根拠となる行動」を書くことで、どの項目に当てはまるかをよく考える機会となった。チェックリスト1セルに数項目あるところでは、判断に困るところもあったが、「段階、意義」に立ち戻って考えることで整理できたところがあった。

・7割、3割は主観的判断の部分もあるが、基準にはなった。

・すぐに判断がしにくかった用語があった。

【国語-聞くこと】・1-6 相互的な関わりに他人が入ることを促す

【国語-話すこと】・1-6 さかんにおしゃべりをする→喃語も含まれるのか。

・1-6 体系的に課題を解決する

【国語-書くこと】・1-6 相互的な関わりに他人が入ることを促す

・1-6 他の人と一緒にマークやシンボルを動かす
・「体育/運動動作」項目と「書くこと/操作」をどのような関係で考えればよいか迷った。「書くこと」は巧緻性を「運動・動作」は大きな身体的イメージで捉えたがよかったか。

・「根拠となる行動」は、国語でもあり、算数でもありと共通する部分が多く見られ、目標が同じものになるところもあった。しかし、それはそれで、両方の意味を含めた指導であることを指導者側が把握しておくことが大事である。

(研究協力者 宮崎 亜紀)

(3) 重度・重複障害児の指導場面における発達評価の実施

下記のように事例研究として、その経過をまとめた。

①対象児の実態

特別支援学校小学部に在籍する知的障害と肢体不自由の重度・重複障害の児童1名。普通のことばや身振りの理解は難しく、手で持った物は握っているが、自分から放さない。絵本や音の出る物はよく注目する。注意を引きたいときに「アー」ということもある。好きなものへ手を伸ばすことができる。

遠城寺式乳幼児分析的発達検査 (H20.03.18実施)

移動運動 : 0.7~0.8 手の運動 : 0.5~0.6

基本的習慣 : 0.3~0.4 対人関係 : 0.7~0.8

発語 : 0.6~0.7 言語理解 : 0.9~0.10

②手続き

ア 実施期間 : 2008.4~2009.3

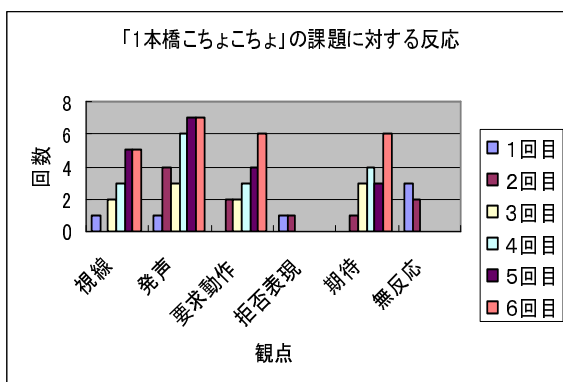
イ 対象 : 特別支援学校に在籍する運動障害を主とする小学部の重度・重複障害のある児童生徒を1名程度を対象とする。

ウ データ収集 : 三項関係における観察場面のやりとり (ボール転がしや手遊び「一本橋こちょこちょ」等) を20分程度ビデオ録画し、行動分析についての文字転写資料を作成する。座位姿勢による対物操作等を行い、発声や視線追従、指さしの理解、社会的参照などの共同注意関連行動に分類し、発達の関連について検討する。

③結果と考察

ア 手遊びの課題「一本橋こちょこちょ」について

1本橋こちょこちょの課題に対する分析結果を Fig.1 に示した。当初は、視線も合わせることはなく、手を触れられることに抵抗があった。また、くすぐる場面でも喜ぶというよりは少し嫌がるような様子も見られた。4回目以降は、「1本橋こちょこちょ」の歌を歌うとにっこりと笑顔になり活動への期待

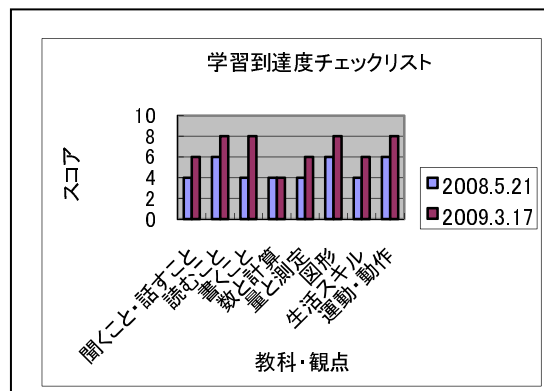


感をもつような行動が見られ、アイコンタクト

トがとれるようになってきた。生じた要因としては、対人的相互交渉において、子ども一対象 (手遊び) - 他者という文脈における三項関係のやりとりから、聴覚的及び触覚的・運動感覚的な媒介を通して、活動への期待感等から他者へ注意が向き、情動を共有したことによって他者の意図理解へとつながったと考えられる。

イ 共同注意関連行動の発達とその支援

学習到達度チェックリストを活用して、実態把握と評価 (Fig.2) を行ない、その段階・意義から一貫した反応や注意の持続、やりとりの予測等を視点に支援することとした。手遊び活動やボール転がし等の三項関係のやりとりにおいて、対面的相互交渉として子どもの姿勢に対応した視野内でのやりとりが重要であった。このことが、アイコンタクトや他者理解の基礎が頭部の挙上やものの操作性を高め、共同注意関連行動である応答の指さしや後方への指さし等の他者の意図理解や提示・手渡し等の発達の基盤が培われ、より高次な社会的参照へと促進されることが推測される。



(研究協力者 古山 勝)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計3件)

1. 徳永豊

自立活動の指導における新たな視点

肢体不自由教育

日本肢体不自由教育研究会

197号 4-9 2010 査読無

2. 徳永豊

イギリスにおける障害のある子ども学習評価(2)

教育と医学

慶應義塾大学出版会

675号 98-106 2009 査読無

3. 徳永豊

イギリスにおける障害のある子ども学習評価(1)

教育と医学

〔学会発表〕(計9件)

1. 徳永豊、古山勝、吉川知夫、一木薫

学習到達度チェックリストを活用した評価と目標設定—「聞く」「話す」について—

日本特殊教育学会第48回大会 長崎 2010年9月20日

2. 吉川知夫、徳永豊、古山勝、一木薫

大人の相互作用スタイルが重複障害児との相互交渉に及ぼす影響

日本特殊教育学会第48回大会 長崎 2010年9月20日

3. 古山勝、徳永豊、吉川知夫、一木薫

重複障害児における姿勢・運動と共同注意関連行動の発達支援に関する研究Ⅱ—学習到達度チェックリストの活用と成果—

日本特殊教育学会第48回大会 長崎 2010年9月20日

4. 徳永豊、古山勝、吉川知夫、一木薫

学習到達度チェックリストを活用した評価と目標設定

日本特殊教育学会第47回大会 宇都宮 2009年9月21日

5. 吉川知夫、徳永豊、古山勝、一木薫

重複障害児との相互交渉における大人の明確化要請と子どもの応答

日本特殊教育学会第47回大会 宇都宮 2009年9月21日

6. 古山勝、徳永豊、吉川知夫

重度・重複障害児における姿勢・運動と共同注意関連行動の発達支援に関する研究

日本特殊教育学会第47回大会 宇都宮 2009年9月21日

7. 徳永豊、古山勝、吉川知夫、齊藤宇開

学習到達度チェックリストの活用(1)—重度な障害の子どもとの授業改善に向けて—

日本特殊教育学会第46回大会 米子 2008年9月21日

8. 古山勝、吉川知夫、徳永豊

重度・重複障害児における共同注意関連行動の発達と学習到達度チェックリストの活用(2)

日本特殊教育学会第46回大会 米子 2008年9月21日

9. 吉川知夫、古山勝、徳永豊

重度・重複障害児との相互交渉における注意を引きつける大人の方略

日本特殊教育学会第46回大会 米子 2008年9月21日

〔図書〕(計2件)

1. 徳永豊

肢体不自由教育ハンドブック：情緒・人間関係の発達と指導

全国心身障害児福祉財団 2010

2. 徳永豊

重度・重複障害児の対人相互交渉における共同注意—コミュニケーションの基盤について—

慶應義塾大学出版会 2009

157

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

関連する報告書

http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kan kobutsu/pub_f/F-138.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳永 豊 (TOKUNAGA YUTAKA)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：30217492

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし